



けん玉で広がった人との出会い

たりのお

大学3年。広島県在住。

ぼくがけん玉を始めたのは、大学に入ってからです。仲良くなった友達がたまたまけん玉が上手だったこともあって、気づいたらDAMA けんに入っていました。それまでは、けん玉にさわったことすらありませんでした。DAMA けんでは、依頼を受けて、地元の小学校や児童館、老人会や老人ホーム、国際交流のイベントなどでけん玉を教えたり、技を披露したりしています。そういった活動が年間100回ぐらいになります。訪れる先々で、たくさんの人たちが喜んでくれます。できなかった技ができたとき、子どもたちが「できた!」と目を輝かせて喜びます。そんな子どもたちの姿を見ると、自分が人の役に立っていることを実感できるんです。

モンゴルでの交流

DAMA けんでは、2002年から毎年春休みに、知り合いからもらったけん玉を300本ほど持ってモンゴルに行って、交流を行っています。実はモンゴルでは、けん玉はかなり知られています。けん玉協会もあります。DAMA けん以外にも、モンゴルでけん玉の交流を行っている人やグループがけっこうあるんです。DAMA けんがモンゴルに行くようになったのも、10年ほど前からモンゴルでけん玉を教えている人に紹介されたからなんです。

ぼくは去年と今年の2回行きました。モンゴルのことばは全然わかりません。でも、けん玉をもっていると、「お前、けん玉できるのか? 見せてくれ」と向こうから話しかけてきて、すぐに交流が始まります。

はじめまして、たりおです。ぼくが所属しているけん玉同好会「DAMA けん」では、地元の子どもたちにけん玉を教えたり、イベントでけん玉の技を披露したりするほか、年に1回、モンゴルにけん玉交流に出かけます。ぼくは昨年代表を務めました。

今年は、ウランバートル¹に約2週間、ホブド²に約1週間滞在しました。ウランバートルとホブドを拠点にして、近隣の町の主に小学校や中学校を訪ねました。20ヵ所以上で開いたけん玉教室や大会に、2,000人以上が来てくれました。毎年行っているところもあるので、懐かしい顔もたくさんあります。1年ぶりに会うと、あいさつもそこそこに、「見て見て! この技できる?」と挑戦してくる子がたくさんいます。上手い子にはぼくも勝てません。でも、それもまた嬉しいんです。

モンゴルでは、多くの人たちがぼくたちを手伝ってくれます。今年、ウランバートルでは、有名な馬頭琴奏者の方の家にDAMA けんのメンバーみんなを泊めてもらいました。その方が弾いてくれた馬頭琴は、今までに聞いたこともないような美しい音色でした。また、毎年、日本語を勉強している大学生が車を出してくれたり、通訳してくれたりして、ぼくたちの世話をしてくれます。初めてモンゴルに行ったとき、いつも手伝ってくれる大学生の一人、ゾリゴーが言った「君たちはいいことをしているから、ぼくも手伝っている。それはわかってほしい」ということばに考えさせられました。手伝ってくれる人、応援してくれる人がいるということは、その人たちの期待に応えなければならないということ、いい加減なことではできない、責任と自覚をもって行動しなければならないと強く思ったのです。

新しい自分を発見



モンゴルの人たちにけん玉を贈呈。

© DAMAけん



モンゴルの子どもたちにけん玉を教える。

© DAMAけん



大学祭で開いたけん玉コーナー。全く初めて見る人もいれば、似たような遊びをしたことがある人もいます。 © DAMAけん

DAMA けんに入るまで、子どもたちと遊ぶのは苦手でした。でも、けん玉をもっていると、すんなり子どもたちの中に入っていけるんです。子どもたちと遊ぶのを楽しんでいる新しい自分を発見しました。

それから、以前はプレッシャーに弱かったり、気が弱いところがあったりしたのですが、人前で話したり技を見せたりする機会が多いことと、昨年一年間、DAMA けんの代表をやったこともあって、少し強くなりました。最初の頃は、緊張して技を失敗したりすると、あせって余計できなくなったりということがありました。でも、場数を踏むにつれて、技を失敗したとしてもあせらないでできるようになりました。また、子どもたちの表情や様子を見ながら、休憩を入れたり、自分が技を見せて集中させたり、そういったことを臨機応変にできるようにになりました。それがまた自信につながっていきました。

けん玉の魅力

けん玉のサークルに入っていると言うと、高校時代の友達からは「は～？ 何やってんの～？」と呆れられることが多くて、最初は、大学生にもなってけん玉をやっているのがちょっと恥ずかしい気持ちもありましたが、今はもう全くないです。友達に言われても、「お前もやってみるか！」と言いつつかえします。

けん玉の魅力は何といっても、やる人を選ばないことです。年齢



- 1 モンゴル共和国の首都。標高約1,300メートルに位置する。人口は約100万人。
- 2 ウランバートルから西へ1425km。飛行機で3時間、車では2泊3日。面積76100平方キロメートル、北海道と同じくらい。南は中国に接している。気温は最高38℃、最低-43℃。人口9万人。家畜約132万頭。



地元の小学校の教室で。授業の一環として依頼されることもある。 © DAMAけん

も性別も関係ないし、運動神経がいい、悪いも関係ない。足が速い人が上手いわけでもない。誰でもできるんです。人によって上手い下手はあるけれど、誰にも平等だと思います。やればやっただけ上手になるんです。練習していると、できなかったことがある日突然できるようになるんです。そのときは、単純に嬉しいです。できたというのがはっきりわかるので、達成感を得やすいんです。それもけん玉の魅力です。

子どもたちにもデジタルゲームよりもけん玉をやってほしいなあと 생각합니다。ぼくは小さいころ、ゲーム少年でした。デジタルゲームだと、限られた人数でしか遊べないので、楽しくないし、広がりがないと思うんです。けん玉だとひとりでもできるし、技を見せ合ったり、勝負したりして、何人でもできるから、広がりがあります。

今後の目標

DAMA けんの目標は、大学の地元であるこの地域でもっともつとけん玉を普及させることです。けん玉は継続しないと上手にならないので、今年から、「DAMA 道場」を開きました。公民館の一室を借りて、月に2回教えています。今は、15、6人が通っています。

子どもからお年寄りまで楽しめるけん玉がもっともつと広まればいいなあと 생각합니다。

雑学博士：何を踏む？

文中に、「場数を踏む」という表現が出てきます。「踏む」を使った慣用句はほかにもいくつかあります。()には【 】のいずれかが入ります。何が入るのか想像してみましょう。

- ① () を踏む：どうしようかと迷うこと。ためらうこと。
- ② () を踏む：ひどく怒ったり悔しがったりすること。
- ③ () を踏む：危険な状況に臨むこと。
- ④ () を踏む：前の者と同じ失敗をすること。
- ⑤ () を踏む：世間に出て苦労すること。
- ⑥ () を踏む：きわめて危険なこと。

【地団駄、二の足、塩、前轍、虎の尾、薄氷】

正解はウェブに掲載しています (http://www.tjf.or.jp/hidamari/)。

てだま お手玉 (沙包)

沙包，就是把赤豆、大米等放入小布袋里缝制的小布包。基本玩法是和着歌曲的拍子，将几个沙包，一边抛一边接。在不同的地方，沙包的名称、里面装的东西、沙包的形状、玩法也会有所不同。

据说，丢沙包起源于公元前1200年左右居住在黑海附近游牧民族的游戏。后经由丝绸之路，传到世界各地。在日本，1200年前主要是女孩子的游戏，由母亲传给女儿，代代相传。到1970年前后，这种游戏慢慢退出了日常生活。最近，也还能常见到小沙包，不过已不是作为玩具而是作为装饰品。

日本の沙包



本栏图片及说明均摘自《お手玉》(沙包)(日本お手玉の会主编/大西传一郎撰文/文溪堂发行/©NIHON-NO-OTEDAMA-NO-KAI & Denichirou OHNISHI)。

世界各国的沙包

澳大利亚



塑料球。里面装着鸟食(呈小米状)。

美国



8到15由金属制的“杰克”(类似陀螺的芯轴，有4根触角)和塑料球组成。

波多黎各



用毛线编织的东西。里面装着鸟食。

法国



用羊的踝骨当沙包。

托球游戏让我广交朋友

我是上大学以后才开始玩托球的。因为我的好朋友托球玩得非常好，不知不觉中我也加入了托球俱乐部“DAMA けん”。在那之前，对托球我连摸都没有摸过。在“DAMA けん”，我们常常应邀去当地的小学、少年宫、老年会、敬老院或国际交流会的会场去教托球游戏，表演托球技巧。像这样的活动，每年都有100多次。我们不管去哪儿，都会给人们送去欢乐。每当孩子们学会了一个新动作，惊呼“学会啦！”时的那种兴奋表情，总能让我感觉到参与其中的非凡价值和意义。

与蒙古进行交流

“DAMA けん”从2002年开始，每年春假，带着从熟人以及朋友那里募集到的约300个托球去蒙古进行交流。在蒙古，托球游戏也很流行，也有托球协会。除了“DAMA けん”，有很多组织和人员也去蒙古进行托球游戏的交流。DAMA けん开始去蒙古进行交流活动，也是通过大约从10年前就开始在蒙古教托球的人的介绍。

去年和今年我一共去了两次蒙古。我一点都不懂蒙古语，但是，看到我拿着托球，马上就有人问我“你会玩吗？表演一下吧”，这样，交流便开始了。今年，在乌兰巴托呆了约2周，在科布多呆了约1周。以这两个城市为中心，我们走访了附近城镇主要的小学和初中。在20几个地方举办了托球教室和表演活动，到场人数总共有2000人以上。也有一些地方因为每年都去，经常可以看到一些熟悉的面孔。虽然一年多没见，有很多孩子刚招呼一声，就迫不及待地要跟我比试。“你看你看，这个你会吗？”有些孩子做得非常好，常常让我自叹不如，同时也让我感到由衷地高兴。

在蒙古，我们得到了很多人的帮助。今年，在乌兰巴托，我们“DAMA けん”的成员住在当地一位有名的马头琴演奏者的家中。那位先生特地为我们演奏了马头琴，琴声婉转动听，犹如天籁。而且，每年都有学习日语的大学生负责接送、做翻译、照料我们的生活。记得第一次去蒙古时，一位总是帮助我们的大学生卓黎果说“我想让你们了解，你们做的是非常有意义的事，所以我愿意帮助你们。”他的话让我感触很深。有这么多支持我们、帮助我们的人，就意味着我们决不能辜负他们的期望，不能敷衍了事，应该认真、负责地开展交流活动。

发现一个崭新的“自我”

在加入“DAMA けん”之前，我最怕和孩子一起玩儿。但是，一

玩起托球来，自然而然地就能融入孩子们中间。我发现一个与孩子们愉快游戏的新的自我。

以前的我是个胆怯、怕紧张的人。随着在众人面前说话和表演托球机会的增多，特别是今年一年，成了“DAMA けん”的代表，比以前稍微强了一些。开始的时候，常会因为紧张而表演失败，越紧张就越做不好。但是，随着出场次数的增加，即便是失手，也能沉得住气，不那么手忙脚乱了。同时，学会了根据孩子们的表情和状态，穿插一些休息时间，或用表演技巧集中孩子们的注意力，随机应变地合理安排活动。这样一来，自己也慢慢地增强了信心。

托球游戏的魅力

和高中时的朋友谈起加入托球俱乐部的事，他们都觉得难以置信“什么？吃多啦……？”刚开始的时候，我也有过“都大学生了还玩什么托球？”的害羞想法。不过现在已经完全没有这种感觉了。现在遇到这种情况，我会反客为主地建议说“你也不妨试试吧”。

托球游戏的魅力在于什么人都可以玩。玩托球没有年龄和性别限制，也不论你的运动神经是否发达。也不是跑得快的人玩得就一定好。只要愿意谁都可以玩。虽然技巧会有高低之分，可是这个几率对谁都是公平的。在练习上下多大工夫就有多大收获。只要坚持练习，不会的技巧，会在某一天突然地就掌握了。那时候的喜悦是不加一点儿水份的。实实在在地学会了、掌握了，不由得让人感到一种成就感。这也是托球游戏的魅力所在吧。

对于孩子们，与电子游戏相比，我更希望他们加入到托球游戏的队伍中。我小时候是典型的游戏机少年。电子游戏，因为一起玩的人数有限，所以既不热闹，又没有什么拓展。而托球游戏一个人能玩，多数人也能玩，既可以相互切磋技巧，也可以比较胜负，人数再多也毫无妨碍，很有拓展前途。

今后的目标

“DAMA けん”的目标是在大学所在地进一步推广和普及托球游戏。因为托球游戏不坚持练习就很难熟练掌握，为此，“DAMA けん”从今年开始还在公民馆租借了一间活动室，开设了“DAMA 道場”，一个月上2次课。现已有十五、六个学员。

托球游戏可以给各个年龄段的人们送来欢笑，愿它能得到更加广泛的推广和普及。

(本文为“人物采访”的中文版)